認知症サポートチームにおける薬剤師の関わり

（地方独立行政法人京都市立病院機構京都市立病院　薬剤科）

細川　真弥　　山南　貴一　　原田　若奈　　大野　恵一
吉村　光弘※　　村岡　淳二

（地方独立行政法人京都市立病院機構京都市立病院　看護部）

坂口　かおり　　北川　陽子

（地方独立行政法人京都市立病院機構京都市立病院　神経内科）

中谷　嘉文

要　　旨

当院では，2018 年 10 月より認知症ケア加算 1 の算定を開始し，薬剤師も認知症サポートチーム（dementia support team：DST）の一員として多職種カンファレンス及びラウンドに参画している．今回，当院 DST における薬剤師の関わりの現状を調査した．2019 年度上半期に，薬剤師は 48 剤の処方提案を行なっており，そのうち 29 剤（60%）が DST としての提案に反映していた．薬剤師の提案内容は，不穏・せん妄状態や睡眠管理に対する薬剤の追加・増量，せん妄を惹起する可能性のある薬剤や過鎮静を誘発する可能性のある薬剤の中止・減量であった．高齢者の薬物療法は注意すべき点が多く，DST への薬剤師の参画は，有益であると思われた．
（京市病紀　2020；40(1)：8-11）

key words: 認知症サポートチーム，薬剤師，薬物療法，チーム医療
※現　調剤薬局マリーン　マキノ病院前店

緒　　言

2016 年度の診療報酬改定において，認知症ケア加算 1 および 2 が新設された．当院では 2016 年度より認知症ワーキンググループを立ち上げ，薬剤師は認知症ケアマニュアルの策定など，施設基準の整備に関与してきた．2018 年 10 月からは認知症サポートチーム（dementia support team：DST）の活動を開始し，認知症ケア加算 1 の算定を開始した．

認知症ケア加算 1 の算定要件として，専任の常勤医師，看護師，社会福祉士または精神保健福祉士によるチームの設置と週 1 回程度のカンファレンスの実施等が規定されている．薬剤師は算定要件の必須職種ではないが，患者の状態に応じて参加することが望ましい職種として規定されており，当院では DST のメンバーとして週 1 回の多職種カンファレンス及びラウンドに参加している．薬剤師は，DST 看護師によって作成されたラウンドシートをもとに，事前にカンファレンス対象患者を把握し，薬学的観点から薬物療法の確認・提案を行っている．認知症患者は高齢者が多く，高齢者に対する薬物治療では加齢に伴う薬物動態の変化等，留意点が多い．また DST への薬剤師参画は他施設でも行われており，薬剤師が認知症のチーム医療に参画することの有用性に関する報告が散見される[1)]．

そこで，当院 DST における薬剤師の関与の現状を調査した．

方　　法

2019 年 4 月から 2019 年 9 月の期間，多職種カンファレンス時の介入患者を対象として，ラウンドシートと診療録から後方視的に調査を行った．

調査項目は患者背景，薬剤師提案の DST 提案への反映数，DST 提案からオーダ等への反映数とし（図 1），処方提案は内容別（薬剤の中止，減量，追加，増量）と薬効別に集計した．

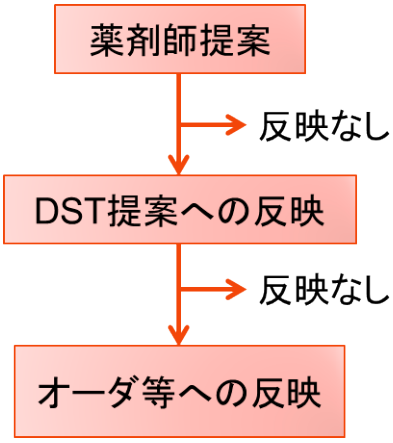

図 1　薬剤師提案の流れ

結　　果

1. 患者背景

延べ介入患者数は 298 名で，男性 167 名（56.0％），女性 131 名（44.0％），介入総件数は 755 件であった．年齢の中央値は 84.5（51-103）歳であった（表 1）．介入開始時の認知症高齢者の日常生活自立度は，Ⅰおよび Ⅱa・Ⅱb の患者は 0 名，Ⅲa は 59 名（19.8％），Ⅲb は 67 名（22.5％），Ⅳは 115 名（38.6％），M は 53 名（17.8％）であり，Ⅳの患者が最も多かった。（図 2）．

表 1　患者背景

延べ介入人数（総件数）	298名（755件）
年齢（範囲）	84.5歳（51—103）
性別　男性	167名（56.0%）
（割合）女性	131名（44.0%）

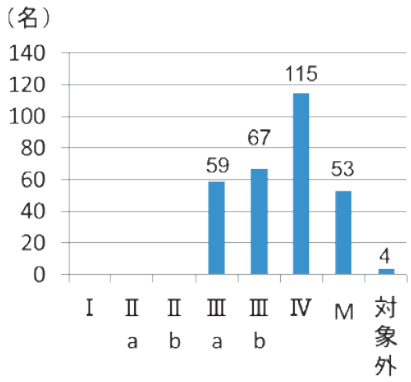

図 2　認知症高齢者の日常生活自立度

2. 薬剤師の提案剤数

薬剤師は 35 名の患者に対し，48 剤の提案を行っており，そのうち 29 剤が DST 提案に反映していた．DST 提案に至ったもののうち，主治医のオーダ等に反映していたものは 22 剤（76％）であった（図 3）．DST 提案に反映されなかった 19 剤は DST カンファレンスにおいて変更不要と判断された．

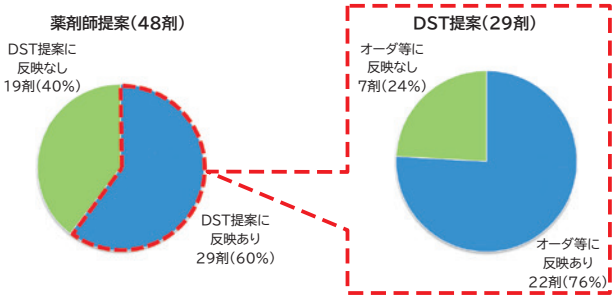

図 3　薬剤師の提案剤数

3. 薬剤師提案内容

提案内容別では，薬剤師提案／DST 提案への反映／オーダ等の変更ありの順に，薬剤の中止が 10／9／6 剤，減量が 5／3／3 剤，新規薬剤の追加が 26／14／10 剤，薬剤の増量が 7／3／3 剤であった（図 4）．

薬効別では，薬剤の中止・減量の提案は，ベンゾジアゼピン（BZD）受容体作動薬や抗精神病薬が多く（図 5），追加・増量の提案は，抗精神病薬が多かった（図 6）．

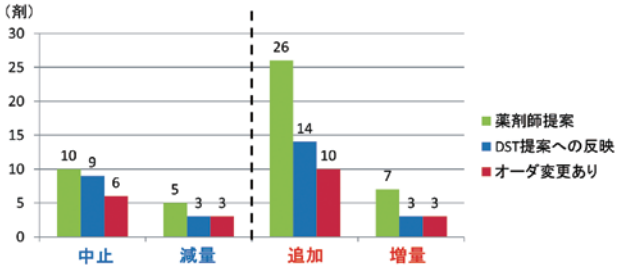

図 4　薬剤師提案の変更内容

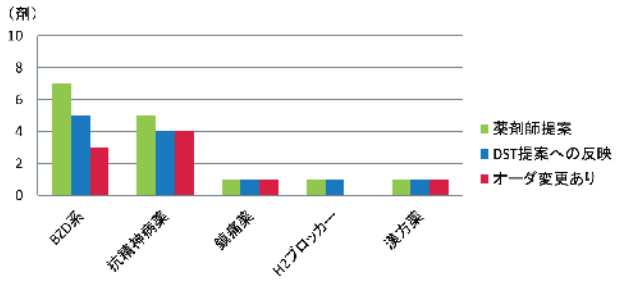

図 5　中止・減量の提案

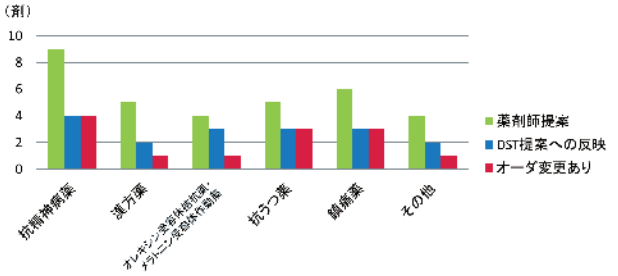

図 6　追加・増量の提案

考　　察

DST において，薬剤師は約 1 割の患者に対する処方提案を行っていた．提案内容のうち，60％が DST 提案に反映していたが，40％は DST カンファレンスにおいて変更不要と判断されていた．薬剤師提案の内容別では，薬剤の中止・減量と比較して，追加・増量の提案は，DST 提案に反映される割合が少なかった．追加・増量の提案薬剤を薬効別でみると，不穏・せん妄状態に対する抗精神病薬等の提案が多い傾向であった．不穏・せん

妄状態については，DSTカンファレンスにおいて，多職種でリスク評価を行い，ケアなどの薬剤以外の方法を検討・提案できたため，抗精神病薬等の追加・増量はDST提案に反映される割合が少なかったと考えられる．また,睡眠管理が必要と考えられる症例に対しては，BZD受容体作動薬によるせん妄リスクに配慮し，スボレキサント，ラメルテオン，睡眠作用のある抗うつ薬などを提案していた.

薬剤師による中止・減量の薬剤提案は，不穏・せん妄に関連するBZD受容体作動薬や，抗精神病薬等，過鎮静を誘発する可能性のある薬剤が多かった．せん妄は，短期間の入院中にも変化し，改善することもあるため，薬剤の追加・増量だけでなく，経過によっては中止・減量の視点も重要と考えられた.

DSTによる薬学的介入は，院内の認知症ケアマニュアルに沿った内容も多いが，スボレキサントやラメルテオンなどとの併用禁忌の薬剤や，腎機能低下患者におけるリスペリドンの効果遷延など，提案に際して注意が必要な場合も多く，DST薬剤師により薬歴や腎機能などの患者情報を把握することは重要と考えられる．また，薬剤変更の理由や介入前後の状態把握は，病棟薬剤師と情報共有することで，継続的に薬効や副作用の確認を実施することが望ましいと思われる.

今後も認知症合併患者に対する薬物治療の適正化に貢献できるよう，病棟薬剤師との連携や薬剤によるせん妄リスク低減などの取組みも必要と考えられた.

結　　語

DSTにおいて薬剤師が関わることで，有益な点はあった．より的確なチーム提案を行うためには，最新の患者状態を多職種で共有することが重要と考えられた.

引　用　文　献

1）森光輝，宇佐美英績，吉田光代，他：認知症ケアチームへの薬剤師参画の有用性～メマンチンの適正使用における貢献～．日本病院薬剤師会雑誌　2019；55(12)：1447-1452.

Abstract

Pharmacist Involvement in the Dementia Support Team (DST)

Maya Hosokawa, Kiichi Yamanami, Wakana Harada,
Keiichi Ohno, Mitsuhiro Yoshimura and Junji Muraoka
Department of Pharmacy, Kyoto City Hospital
Kaori Sakaguchi and Yoko Kitagawa
Department of Nursing, Kyoto City Hospital
Yoshifumi Nakaya
Department of Neurology, Kyoto City Hospital

In our hospital, we started receiving dementia care incentive Type 1 in October 2018. Pharmacists also participate in multidisciplinary conferences and rounds as members of the dementia support team (DST). Here, we investigated the current status of pharmacist involvement in our DST. In the first half of 2019, pharmacists proposed 48 medicines, of which 29 (60%) were adopted in the proposal as DST. The pharmacists' proposals were to add or increase medicines for restlessness / delirium and sleep disturbance, and to discontinue or reduce medicines that may induce delirium or oversedation. There are many factors that require close attention to drug therapy for the elderly, and the participation of pharmacists in DST seems to be beneficial.

(J Kyoto City Hosp 2020;40(1):8-11)

Key words: Dementia Support Team, Pharmacist, Drug therapy, Team medical care